

たぐみ

Craftsmanship

特集 夏の特選「蔵出し市」
寄稿 益子の汽車土瓶

第52号

電気を食べる異星人の話

デジタルやITの時代に宇宙からの異星人の話も珍しくはないが、これは今から何十年も前に書かれた物語である。環境市場新聞という季刊の業界新聞の、今季冬季号の「環境見聞」というコラムで紹介されていた。奇想天外だが、妙に説得力があつて心につつまでも残り、孫引きながら皆さんにもお読みいただきたい。

SF作品で知られたアメリカの作家フレドリック・ブラウン(1906～1972)の作品で、『ウアヴェリ地球を征服す』という短編である。面白く着想で、宇宙からの侵略者が、地球上で電気が発生すると直ちに吸い尽くしてしまうという話である。

しかしこのウアヴェリという侵略者は、よくある同類の物語のように暴力的な異星人ではない。このコラムからストーリーのあらましを記そう。

この宇宙からきた集団は、人間とは異なる知性を持つてはいるが、いわば現象のようなもの。雷など自然の電力から、水力や火力発電など人工的に作られた電気までを吸い取る以外、これといった害は加えない。人間からは姿形も見えないのである。

そこでこの状況の中で人類は比較的冷静に、電気が奪われる事態に対処する。政府も民間も一丸となつて蒸気機関を復活させ、日常の力仕事には馬や牛などの力を利用し、あらゆるところで小規模な手工業が盛んになる。電気が使えず一時的に大勢の失業者が出るが、すぐに手工業の需要がふくれあがり求人難にさえなつていく。人々は身の丈にあつた、ゆつたりとした生活に立ち戻る、というのである。

因みにこの新聞を発行する日本テクノという会社は、原発に代わるエコ・エネルギー開発の企業という。健闘を祈りたい。

(志賀直邦)

たくみ特別展 夏の特選「蔵出し市」

会期 平成二十四年六月三日(土)～七月二日(月)

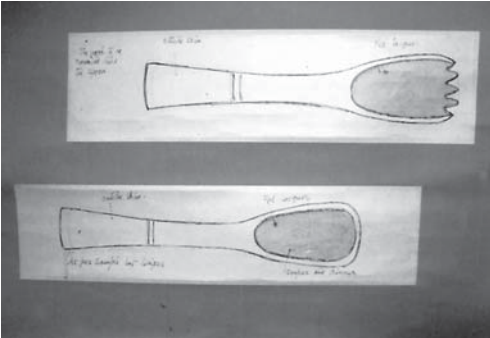
六月二四日(日)、七月一日(日)は営業いたしません。

会場 たくみ二階ギャラリー

営業時間 一時から一九時まで(日曜、最終日は一七時半まで)



流掛茶盃 (濱田庄司)



額装 竹フォーク・スプーン図 (バーナード・リーチ)

出品品目

● 陶 濱田庄司、島岡達三、金城次郎、塚本快示、西岡

小十(唐津)、加藤孝造(瀬

戸)、益子焼、小鹿田焼

食器、水野半次郎(瀬戸)

の睡蓮鉢、火鉢、沖繩壺

屋の厨子壺など

● 布 きもの布地、風呂敷、端布、海外染織品など

● 木 漆の重箱、盆、鉢、肥松の銘々皿、小机、箆笥など

● 雑 吹硝子、型硝子の器、竹細工、山ぶどう手提、玩具など

● 絵 大津絵、型染絵、ガラス絵など

● 本 美術、工芸関係ほか、一般図書など

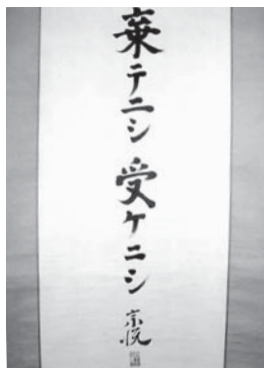
● 本 美術、工芸関係ほか、一般図書など



板絵 春夏秋冬 (芹沢銈介)



軸装 彩色 弁財天 (棟方志功)



軸装 心偏 (柳宗悦)
こころうた



小舟文陶板 (船木研兒)



軸装 大津絵 槍持ち奴



赤絵皿 (合田好道)



電気スタンド (鳥取)



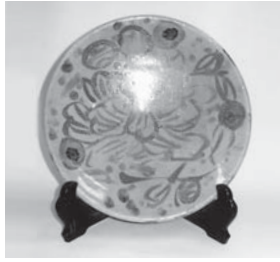
軸装 大津絵
寿老人と大黒様



厨子甕 (沖縄・明治期)



汽車土瓶 (信楽)



赤絵皿 (合田好道)



蝸牛絵皿 (船木研兒)



汽車土瓶 (信楽)



鉄絵皿 (中国)



睡蓮鉢 (水野半次郎)



青土瓶 (小鹿田焼)



菊文石皿 (瀬戸)



赤絵茶盃 (小橋川仁王)



古作口付壺 (小岱焼)



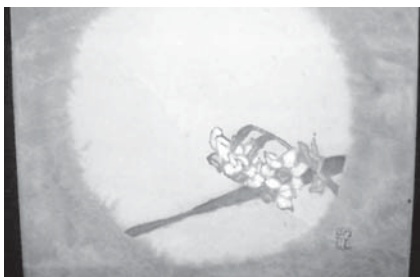
手焙り (瀬戸)



火鉢 (瀬戸本業窯)



鉄絵湯呑二種（濱田庄司）



軸装水仙図（合田好道）



茶器（松木研兒）



徳利（左から備前、信楽）



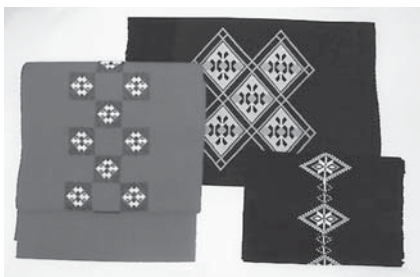
ネクタイ（型染・唐棧織・絞り染）



飯碗二種（砥部焼・昭和40年頃）



弓浜絵紺裂地各種



こぎん刺し 帯・裂地

大野村の汁椀と沢口さんの意見

志賀 直邦

私が民藝の道に入ったのは一九五五(昭和三〇)年四月のことであった。

ふり返れば余りに永い道のりであったが、その間お世話になり導いていただいた方、また親しくした友人との交友の想い出は尽きない。昔はファックス、メールなどの簡便な伝達手段はなかったから、便りは手紙や葉書の自筆に限られた。中にはいつも和紙の巻紙に毛筆でくださる方も何人かおられて、ご返事を書くのに四苦八苦したことを覚えていいる。ある時に「きみの手紙は筆ペンだね」と喝破されて恐縮したことがあった。

そんなことで私は心のこもった手紙やご意見は、保存している。昨年の師走のころであつたらうか。仕事機の資料ファイルの中に、沢口滋さんの『大野村論争資料(仮題)について』と題する論稿があつて読み返してみた。

沢口氏は宮城県鳴子温泉の漆工で、一九八四年と八五年に日本民藝館展の審査員をされていた。氏の問題提起は要約すれば、館展における手仕事とは何か、そして許容される新しい材料や技法の範囲はどこまでか、ということであった。

この論稿は、原稿用紙に二千字余り、私がいただいた時、民藝館には清書して届けたといわれた。あれから二八年、沢口さんの提起した課題は、今なお重い。なによりも物づくりの工人にとつて、材料の手配や製品の販売などの社会環境が激変してしまつたこと、工人の高齢化や地場に需要がなくなつたことなどあつて現実の製作実態すら二〇年、三〇年前の一、二割程度だろう。

今さら大野村の新作汁椀の話でもあるまい、という方もおられると思うが、再読してみても日本の伝統的な生活文化

と、今なお残された民藝の仕事はどう受け継ぐか、絶望せずにもとかく議論をしてみたい、と思うのである。

沢口氏も没して久しい。僭越とは思ふが、氏に代わつてその論稿の概要を紹介したい。

○ 日本民藝館展の審査で沢口氏が問題としたホツコ(岩手県大野村の木工房)の製品とは、径四寸余りの拭き漆風の汁椀である。現地産の木材材ながら下地固めに合成接着剤を用い、仕上げ塗装にはポリウレタンを使用している。さらに木目をはつきり出すためにペーパー研磨を行なっている。

大野村の一連の木工品は村内、地域の小中学校の給食の器として、その扱い易さ、軽さ、デザインなどから一定の評価をすでに得ていたのであつた。だが沢口氏は地方民藝としての漆器の良さを守るために、その本来の塗の美しさ、堅牢さ、用いる木材の性質や木目を活かした木取りなどの必要条件を問題にする。沢口氏はいう。

漆の仕事は、漆、刷毛、こし紙、研炭、素地など多くの異なった技術の複合によって成立する手工芸である。それらの周辺技術の多くは山村に生きた人々の生業として存続されてきた。それらが高度経済成長政策による燃料革命によって根底からくつがえされた。

そればかりではない。伝統技法の衰退は、合成の成形素地に化学塗料を吹付け塗装する多くの漆器産地の安易なやり方にある。

さらに氏はこのように述べている。「今年度の日本民藝館展の審査は、今後の民藝運動の在り方に一つの問題を提起した。それはホッコの製品を館展が民藝品として認知した上、高く評価し、日本民藝協会賞を与えたことである」とし、さらに二日目の審査会で自ら述べた意見を次のように記している。

「ここに出品されている作品のほとんどは、良否はあっても手仕事で、つまり長い時間をかけて習得した自らの技術で作られたものである。しかし私

たちの世界は工業化がすすみ、そのため私自身がそうであるように、手仕事に携わる方たちはその領域が次第にせばめられ苦しんでいる。工業的生産方法が手仕事と基本的に異なっている点は、他人の開発したノウハウで物を作ることにあると思う」と述べ、昨日入選したホッコの製品もまたその類であって、館展の審査の対象とすることに賛同できないという。

これに対し、「柳宗理館長と秋岡芳夫氏から発言があつたが、それは作品の評価についてであつて、私の意見に対応するものでなかつた」。さらに「その後の経過から見て、私の意見は審査員の多くの賛意がえられなかつたことは明確であつた」と書いている。

○

私は二八年前の暮れ、沢口氏の論稿を受け取つたあと、すぐ審査員の一人であつた柳悦孝先生を訪ね、また同じ審査員であつた岡村吉右衛門氏とも会つて、その時の審査の内容や受賞の経緯を尋ねたのであつた。そのころ私

は館展にはかかわつていなかったからいささか出過ぎた行為であつたと今は思うが、民藝の現場にかかわるもの一人として沢口氏の問題提起に無関心ではいられたのであつたのである。

柳悦孝先生も岡村氏も、そのもの自体の形態と仕上げの良さに賛意を表されたのであつて、素材の強弱や化学的塗装の良否、加工技術における問題点については余り関心をもたなかつたといわれた。これからはそういったことにも注意を払わなければならないだろう、とも付け加えられた。

民藝、手仕事の分野で、今日では日常の生活の中で衣、食、住にかかわる製造、加工、また使用上の知識などを身近に学ぶ場がない。情報があふれ伝達手段が発達したといいながら、われわれは昔のように、実生活のなかでそれらを身につける術を失つてしまつていないことをもつと反省しなければなら

益子の汽車土瓶 ―用の美をひらく―

嶋本 裕子

関東地方には、そのむかしから民窯として知られた笠間焼、益子焼、小砂焼がある。これら三つの瀬戸場は距離的にも近く、互いに交流しあう関係にあったとみえ、職人往来も当然あったという。

笠間焼は、十八世紀後半ごろ、信楽の瀬戸職人長右衛門が笠間に来て、久野窯の益信と陶器づくりを始めたのが最初という。当時、笠間藩は牧野氏、益子は黒羽藩のもと、各々の藩による窯業統制、専売制のもとにあった。幕末期、世情変化の争乱のなか、消費物資の自給自足という国策がなされた。いわゆる殖産振興策である。

益子焼の歴史は、嘉永六（一八五三）年頃という。丁度明治維新の十五年ほど前である。大塚啓三郎が笠間と相馬

の技法を習得し、この地でやきものを始めたのが益子焼の創始といわれる。

益子焼の名は、昭和五（一九三〇）年、益子に窯を開いた濱田庄司の名とともに戦後の「民芸」「やきものブーム」に乗って最盛期を迎え、全国的に知名度が増した。日用雑器という対象と、土の素朴な味わいを求めて全国から陶芸家を志す若者たちがこの地に根をおろした。そのおおもとは、さまざまな交流の受容と、のびのびと自由に作る作風の受容とで人々が増え、自由な気風を特徴として守りぬかれたことが基盤にあるといえる。

江戸時代、官制下にあった益子の当時は、土瓶、すり鉢、紅鉢、片口、徳利、土鍋、土釜、行平などの生活用品を作っていた。そのなかでも主に土瓶

を江戸に出荷し、これを藩役所の管理運営下においた。この実績から、そのち明治時代には経営の基盤を地元金融で地固めすることが出来たともいわれる。さらに明治三六（一九〇四）年には「益子陶器伝習所」が設立されるなど、かつての官制が道をつける一方で、明治後期から大正にかけて窯業の伸び悩みが顕在化してくる。

そのころに益子焼を支えてくれたのが「汽車土瓶」である。関西方面から来た職人がこの製造に従事し、そのち「汽車土瓶」の生産で日本全体の半数を占めるまでの勢いとなっていたのである。

◇

汽車土瓶は、明治二〇年代からおよそ昭和三〇年代前半まで全国的にはやった駅売弁当に付随したお茶の瓶のことである。汽車土瓶の歴史をひもとくと、それは明治二六年、草津線の鉄

道の駅で最初に売られたもので、信楽の神山村の窯のものであったと伝えられる。それ以降、汽車土瓶は、信楽、瀬戸、美濃小名田、伊賀丸柱、丹波立杭、益子などで焼かれることになる。

益子は神山と同時に、幕末から明治にかけての大きな土瓶産地のひとつでもあったので、販売の安定した汽車土瓶の製造に熱心になる窯元も少なくなかった。そもそも汽車土瓶とは何か。

明治時代の日本の鉄道の発達と切っても切り離せぬ縁のある汽車土瓶であるが、もう少しつきつめるとそれは日本人の食生活の歴史とも深くかかわっているのである。一日の食事の回数と駅売弁当とは大きな関係があるといえる。

日本人は古代より一日二食の食習慣であったものが、江戸時代に入って一日三食の食習慣が庶民にも浸透しはじめてきた。さらに米が主食の日本人にとって食事の時に欠かせないものがお

茶である。この習慣が明治期の鉄道の発達とともに駅弁と、それに欠かせぬお茶＝汽車土瓶を見出すことになる。

資料によると、駅弁の歴史は明治一〇（一八七八）年七月の神戸駅に始まるという。これを皮切りに同年の大阪駅、一六年の上野駅、一七年の長浜駅、小山駅、一八年の宇都宮駅と広がってゆく。お茶の方は明治二五年静岡駅、二八年国府津駅で売られ出すとある。この時の形態が汽車土瓶である。

信楽や多治見焼から始まっているとされる。信楽、神山の初期のものには山水模様を描かれていたという。

一般的に汽車土瓶は、容量約二、三斗、内側は無釉で外側は透明釉や鉛釉で仕上げられていた。明治三〇年代の品は胴に当たる部分には呉須で牡丹が描かれた山蓋土瓶や、三彩で山水画を描いた山水土瓶とよばれたもの、また花の題材としてよく知られている四君子

（蘭、竹、梅、菊）などもよく描かれていたという。画師のなかには東京や京都の人もいたという。

益子の汽車土瓶は、明治三八年頃までは、胴には何も描かれていなかった。汽車土瓶は駅売弁当とともに駅で販売していたものだから、値段が抑えられていた。そのうち、販売数量を増やすためには、胴が無記入であればこの駅でも売ることが出来ることに気づく。

そののち更に、明治四〇年代に入り、鉄道事業が拡大、強化されるにつれ列車の本数も増加の一途をたどる。それとともに、無記入か絵柄入りであった汽車土瓶の胴に鉄釉で駅名が記されるようになった。胴の表（注ぎ口を右に見た面）に駅名を、裏（反対側）に販売店名を描くようになったのである。列車本数の増加によって駅弁販売も商売として成り立ってくるようになる

と、それに伴って駅名や店名入りの汽車土瓶は「宣伝」効果として販売の促進につながっていった。

◇

汽車土瓶の基本の製造過程は、胴、口、蓋を各々別々に水挽きし、やや乾いた段階で削り上げ、胴に口を接合し、ヨリ土（ひも状の粘土）で「山」（つる受け、耳ともいう）を付けて整形を終える。このあと乾燥、素焼、本焼という道をたどる。

それが大正時代（一九二〇年代）の後半には省力化の必要性から、形態の簡素化を余儀なくされ、ヨリ山が前方の一つ、後方には山の代わりに穴を開けたものが作られるようになった。更に製造時間の短縮のために胴のふくらみをおさえて丸みを少なくした。

また一時、大正の末頃からガラス茶瓶なるものが登場したこともあった。しかし利用者の不評もあって長くは続

かず短命のうちに終わり、昭和五年頃には再び陶器土瓶へと復活していったのであった。

のちにあちこちの地方から発掘されたカケラから想像できることは、当時鉄道の発達によって遠出の旅を知り始めた人々が、その旅の気分の記念にこの弁当についていた汽車土瓶を家に持ち帰ったことがうかがえる。あるものは家庭で茶瓶として用い、あるいは薬草の煎じ用にし、時には子供のままごと遊びにと、多様な転用のさまがみとれるのである。

益子の汽車土瓶は、宇都宮、水戸、大宮、福島、郡山、仙台、小牛田、盛岡、新庄、秋田、高崎、横川、長野などの各駅で売られていたようである。胴の部分に平がなで駅名が描かれているもののなかには、ごでんば（御殿場）、こくぶんじいき（国分寺駅）など、当時の益子の方言ともいえる発音の特色

がうかがえるものがあつたという。

更に表現といえば、初期の山水画や色絵には、単純ななかにのびやかな自由があふれていて、身近にあつて飽きのこない雰囲気を持つている。さり気ないなかに見出す生命のようなものといったら大げさであろうか。それはとりもなおさず日用雑器のまさに「用の美」であろう。

長い時を経て、旅のスタイルの変化に応じて汽車土瓶がこの世から姿を消して久しい。秒単位で刻々と発展してゆくこんにちの忙しい時代にあつて、駅ホームの風景も列車内のそれも全く様変わりしてしまっている。しかし名もない沢山の陶工たちの技と絵心ころが、当時、旅の車窓に一刻の彩りを添えた確かな時期があつたことだけは、われわれすべての記憶のなかにとめおきたいものである。

（筆者は国立国会図書館・主査）

サク

二浦 正宏

古い時代、北海道のアイヌの人たちは、夏は海辺に住んで魚を捕って暮らし、冬は山に住んで狩りをして暮らしていた。

夏を過ぐす海辺の家をアイヌ語でサク・チセ（夏・家）と呼び、サクチセに住んでいる期間をサク・パ（夏・年）といった。同じように、冬を過ぐす山中の家をマタ・チセ（冬・家）と呼び、マタチセで過ぐす期間をマタ・パ（冬・年）といった。

古代のアイヌの人たちは、いまの私たちのように一年を四季に分けて考えることはなかった。もともとは春も秋もなく、また、夏と冬は「季節」ではなく「夏年」と「冬年」というそれぞれ独立した「一年」だと考えていた。時の流れには夏年と冬年の二種類の年があり、それが交互にやってくるのだと考えていたのである。夏を過ぐせば

一つ年を取り、冬を過ぐせばもう一つ年を取るのである。

金田一京助の訳書『アイヌ聖典』（大正十二年）の詩曲のなかに、

サク・パ イワン・パ

（夏・年 六・年）

マタ・パ イワン・パ

（冬・年 六・年）

という句がある。この表現は「幾年も幾年も」と訳される永い年月を表す慣用句として古い神謡のなかで使われる。これらの神謡に出てくる季節名は「夏と冬」ばかりで、春（バイカル）と秋（チユク）が出てくることはない。アイヌ語の地名に出てくる季節名も、夏（サク）と冬（マタ）ばかりである。

JR北海道の宗谷本線に咲来（さつくる）駅がある。咲来はアイヌ語のサク・ル（夏・路）が起源で、夏に山越えをする通路につけられた地名である。オホーツク海岸の枝幸から日本海岸の天塩まで、夏はこの咲来を通じて

峠を越えたのである。北海道上川の榎留（さつくる）も、紋別市滝川の札久留（さくる）も同じアイヌ語地名で夏路（サク・ル）を示している。

稚内市の又留内（またるない）はアイヌ語のマタ・ル・ナイ（冬・路・沢）を呼んだ地名で、夏路が雪で通られなくなったとき「冬はこつちの沢を通りなさい」と教えてくれる地名である。

秋田市の上北手地区に「桜」という地名がある。この地名は中世『豊臣秀吉朱印蔵入帳写』に「さくら村」と初見される古い地名である。この地区を流れる太平川と宝川の合流地には遊山長根と呼ばれる小山があり、由緒不明の館跡もある。この地形が、もし北海道にあつたなら「桜」という地名はアイヌ語のサク・ル（夏・路）の転訛だとみえるであろう。

現在わずかに残るアイヌの神謡や地名のなかに、そのむかし春も秋もないきびしい自然の中で日々を過こした古代人の時間感覚が偲ばれるのである。

（筆者は秋田県民藝協会会員）

たくみ歳時記 型染うちわ・新柄いろいろ

昨年の東日本大震災のあと、夏に向かつて、早々とうちわが売り切れてしまいましたが。一時、停電が続ぎ、電気に頼る生活への不安と、木陰やそよ風など本来の自然の涼しさへの回帰から



江戸切子



あじさい



あやめ



ざくろ

か、うちわや扇子の問い合わせは真夏を過ぎても引きもきりませんでした。うちわが浴衣とともに庶民の暮らし

の必需品になったのは江戸時代の中ごろからですが、竹の縁台に風鈴、ピードロの金魚鉢などの風物詩は今なお懐かしい思い出です。今回紹介する麻地の型染うちわは大橋工房の新柄です。

あとがき

昨年の三・一一大震災のあと、数日してから「たくみに来るとホッとする」といつて立ち寄られる方がふえた。

世界の金融崩壊、国家主権や利権を争う地域戦争、地球的な広がりを見せる核放射能や環境の問題が、解決の糸口も見えないまま心を惑わせる。

戦後の復興時代の貧しいながらも明るく未来を信じることのできた、あのころが懐かしい。今から百年前、欧米列強が資本や市場のさらなる支配を求めて世界の再分割をはかり、世界大戦を起こした教訓を忘れてはならない。

世界の民族や地域の、言語や衣、食、住など文化の固有性を、あらためて尊重することが人類再生の糸口になるだろうことを信じていたい。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇一―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)